

みんなで築こう 素晴らしい竹田市 What a wonderful world!

## 土居昌弘の大分県議会議員活動報告

# 羽ばたき

明るい方へ  
明るい方へ



平成22年  
夏季号

編集：土居昌弘を育てる会編集部 発行：土居昌弘  
土居昌弘連絡事務所 〒878-0005 竹田市挾田670番地  
TEL 62-4848 FAX 63-0124  
<http://www.doi-masahiro.jimusho.jp/>

## 竹田市民みんなで「農村回帰宣言」!!



### 農のいとなみに憧れて

2年前のこと。知人が「先日、高野山の大学の先生が竹田に来て、仏教の話をされた。土居さんにも聞かせてあげたかった」と言い、その時のお世話役をされていたのが「吉見さん」ということでした。

「吉見さん」??? 萩に住んでいる??? どんな方だろうと、会ってお話したいと思っていたところ、萩の農家の方のご紹介で、ご縁をいただきました。

萩で農業をしながら暮らす、吉見博さんと和子さん。2007年に神奈川県横須賀市から萩町へ。博さんは、それまで勤めていた外資系の会社を退職し、農業がしたいと、縁もゆかりもないこの地を選び、暮らしています。全国のなかからこの竹田市を選んだのは「2005年に久住山、祖母山に登り、竹田市の魅力に触れたから」とのこと。そこで、特急列車が停まる萩駅付近を選んだそうです。

豊後大野市の農業大学校で学び、いざ実践。1年

目には、大分みどりピーマン10aあたりの収穫、第1位に！現在は、米、ピーマン、ミニトマトを中心に2haを耕作。認定農業者でもあります。作物が農業の作法を教えてくれると、自然の力に頭を下げています。

農のいとなみを始めて、うれしいことがあるそうです。それは「初めて栽培するピーマンの畝づくりを、農家の方々が手とり足とり教えてくれたことに感動。そして、それが縁で培われた人とのつながりが大きな財産」。



朝はピーマンの出荷です

さて、農村回帰宣言をした竹田市。空き家を管理し、全国に情報発信して、移住・定住を促進しています。これを推進するのに力強い原動力となるのが、市民の力なのです。

竹田市には今の日本が失いつつある「もやい」の精神が、まだまだ残っています。「もやい」とは、みんなで仕事をする、共同作業のこと。竹田市に残る「結いの心」を大切にして、市民は支え合いながら暮らしているのです。

この素晴らしい遺産を引き継いでいき、農村回帰した竹田市の魅力にしていきたいものです。

# 土居昌弘一般質問

平成22年第2回定例会県議会は6月8日に開会し、6月22日閉会の15日間開催されました。

6月16日の一般質問で私は「中山間地域（へき地）で暮らす人々に安全・安心を届けましょう」と執行部に訴えかけました。

大分県も国の進む方向に困惑気味でしたが、県の「地方を大切にしたい」という思いは伝わってきました。



安心の地域医療の確保を着実に進めていく。

## (土居質問)

竹田市九重野の小川地区には昨年度の小規模集落対策を活用して、自治会がヘリポートを建設。遠隔集落の救急体制のモデルケースだ。世帯数34戸、高齢化率76.4%。かつては大雨の時に冠水し、孤立した集落。この地区の防災と救急を考えると、重要な取り組み。

また、ドクターヘリに関しては、次のような調査がある。患者の搬送にドクターヘリを使ったものを、救急車を使ったものと想定する。その医学的推定により、ドクターヘリで搬送すれば死亡が4割減。大けがをしながら後遺症のないところまで回復したのは6割増。ドクターヘリを導入することで、救急患者は死なずに済み、社会復帰が増え、病状は軽くなり、入院期間は短縮され、ついには治療費までもが安くなるという調査結果。

ドクターヘリは「へき地医療の生命線」。へき地の救急医療には欠かせないもの。今後のへき地救急医療体制をどうするのか。

## (県答弁)

山村・離島などのへき地では、緊急時に二次・三次の救急医療施設までの搬送時間が長くなるという課題がある。重篤な患者など、症状に応じてドクターヘリや防災ヘリを効果的に活用していきたい。

# ドクターヘリコプターの導入を



九重野の小川自治会での患者緊急搬送訓練。県防災航空隊との連携を確かめ合った。

## (土居質問)

時速200キロで空を飛ぶヘリコプターを活用して、医師と看護師を救急現場に送り、その現場からいち早く医療を開始して、救急患者の救命率の向上を図るのがドクターヘリ。県のドクターヘリの導入に向けた考え方を伺う。

## (県答弁)

住み慣れた地域で安心して暮らしていくためには、生活の基盤である医療の確保が重要であり、特に救急医療体制の充実が必要。県では今年度からドクターヘリの導入を検討していく。審議は、大分県救急医療対策協議会とする。導入は、平成24年度からを目指す。広域救急運搬体制の充実を図り、安全・



県議会の委員会で小川地区のヘリポートを現地調査。地域に「安心」を提供できるように議論。

# 玉来ダムの建設を



## (土居質問)

竹田市は、昭和57年と平成2年に大きな災害に見舞われ、死者と多額の被害を受け、市民はあの時の恐怖を忘れていません。玉来川流域の人々は、少しでも早い治水対策を望んでいる。玉来ダム建設へ向けた事業の進捗状況は。

## (県答弁)

玉来ダムの構造は新工法を採用して、これまでのダム工法の成果を活かしたコスト縮減策を予定している。平成21年度には、国土交通省との協議で、重力式コンクリートダムを建設することを決定。ダム周辺はほぼ山林で、大きな付け替え道路は必要ないことに加え、洪水時以外は水を貯めない、環境負荷の少ない構造（穴あきダム）としている。

今年度は本体工事に備え、用地調査や工事用道路の調査設計に取り掛かろうとしていたが、国からの要請を受けてストップの状態。

## (土居質問)

「コンクリートから人へ」政権が代わりダム・治水政策が大きく変わった。国は「できるだけダムに頼らない治水対策」と言っている。仮に、玉来ダムを造らないとした場合、どのような治水対策が考え



平成2年の災害の様子。玉来川が氾濫し、多大で悲惨な被害を被った。

竹田文化会館前の大分バス(現竹田交通)の駐車場

られるか。

## (県答弁)

①河川の再改修 ②放水路 ③遊水池などの手法が考えられる。

①再改修は、予定のダムの洪水調節量に見合うように河川を掘削、あるいは堤防をかさあげする。約11キロの工事区間となる。

②放水路は、バイパストンネルを市街地の地下を通し、大野川に直接放水する。その延長は、約1.5キロになる。

③放水池は、市街地の上流で大きな池を造り、そこに洪水を一時的に貯めるもの。中流部の優良農地の買収と集落移転が必要となる。

## (土居質問)

玉来ダム建設は、ダム周辺の方々だけの問題ではない。玉来・拝田原をはじめ、流域に暮らす人々がいる、そこで仕事をする人々がいる、買い物をする人々がいる、竹田市民の生活を支える地域の大きな問題なのです。県の基本的な考え方を伺いたい。

## (県答弁)

ダム以外の治水対策案は、大規模な家屋移転、橋梁の掛け替えが必要であり、湧水の枯渇といった事態も想定される。このため、社会的影響が極めて大きいことから、住民の理解を得にくく、合意形成に長期間を要することにも。県としては、早期に効果が発揮でき、コスト的にも優れた治水対策は、ダム建設が最良と考えている。国へ引き続き、政策提言していく。



玉来ダム完成予想図



いまだに危険が潜む玉来川

## 市民の豊かさ



芸術家と子供たち、地域社会とが一体となって、どんどん成長していく。この夏の大切なイベント。8月21日(土)は、アルテヴィーヴァ・コンサート「クレッシェンド in 竹田」。8月28日(土)には、喜多流「竹田新能」。

芸術に育まれる竹田市民。この恵まれた環境があるからこそ、豊かさが醸し出されるのです。

## どうなる警察再編



県警察では現在、警察署再編を検討しています。警察署配置の見直しで統合の対象は、警察官定数50人未満の警察署。竹田署も、豊後大野署も、その対象。

ただし、両管内とも管内が広いですし、山岳遭難も多い。また、県境でもあることなどを考慮しながら、検討してもらいたいと要望しています。

## 微かに明るさが



口蹄疫が発生したことを受け、5月以降閉鎖中の豊後豊肥市場が7月12日に再開！6月県議会でも、口蹄疫緊急対策の補正案は、知事提案後の委員会審議を経て、即日可決。県議会の歴史が始まって以来の迅速な対応が「少しでも畜産農家のお役に立ちたい」という議会の思いの表れ。

市場に光が射してきました。口蹄疫の終息宣言と、これからの竹田市畜産業の盛り返しを願い、活動していきます。

## 竹田のまちの雰囲気



県ではこれから、竹田都市計画区域マスタープランの見直しをしています。これまでの「拡散型」都市計画から、これからは「集約型」都市計画へと転換。

竹田地区に引き継がれている歴史や観光資源を活かしながらのまちづくりをしていこうとしています。

古いものを壊す街、残す街、生かす街。好きな街はどこですか。—これは、ある写真家の写真展のコピー。大いに議論して、そこから生まれた未来予想図を実現していきましょう。

## 議会改革 県行政と県議会。自治体の両輪としての覚悟。

大分県民を代表する知事と議員たち。知事は県民の声に耳を傾けながら政策を執行し、議会も県民の思いを汲み取りながら議決し、また、提案する。

県民の代表であること。この2つの代表は、その意味を吟味し、その意味するところを行動で示さなければならない。そうして築かれる社会こそが「行政による生活世界の植民地化」(ハーバーマス)という統治の世界ではなく、自治の世界なのだ。

県議会議員は県政を調査し、そこから論争点を発見して、みなさんに伝える。人々にとって、一番大切な論点を伝える義務がある。一方で、そこに私の意見を含めて多様な議論が披露され、意見の相違があれば、それを調整する能力が求められる。

私の抽出した論点をどう伝えるか。また、県民の声や思いをどのようにして頂くか。そして、合意をいかに求めるか。私にとって重要な課題だ。

この秋から県議会も通年化に向けての試行が始まる。決算特別委員会などのしくみが変わり、会期も大幅に延長される。これまでは自治体の両輪(知事と議会)のバランスがよくなかったが、今後は大分県が未来に向けて、より安定した走行ができるように、議会の輪も大きくしていかなければならない。

自分の大事な課題の解決に取り組み、議会の輪の一員としての活動を全力でしてまいります。 土居昌弘



人々の幸せのために